

## 2025年 中学入試算数講評: 栄光学園中学校

遥か前から、受験のトレンドに囚われることなく、独自の出題スタイルを築き貫いてきた栄光学園。

独自のスタイルの特徴のひとつが、まず、出題の題材。知識のみで対応できるような問題や、煩雑な計算の処理を含め、定型的なパターンの反復・再現をすることで対応する問題が極めて少なく、試行錯誤してからの発見を中心とした、「算数の楽しさ」「考えることの楽しさ」を凝縮したような問題を一貫して扱っています。また、筆者が問題意識を感じ、7年前に記事にしたものなのですが([中学入試・革命前夜。パターン化学習の無限ループから子どもを解き放て。](#))、「学校は目新しい問題を出題し、塾がそれを翌年以降のカリキュラムにする」というループ構造によって、受験生の学習負担はどんどん増え、また、入試問題も年々高度になっていく構造がある中、同校の出題は、そうならないように工夫されています。見たことがない問題が多く出題されるものの、その問題を解いたことがあるかどうか自体は翌年以降の問題には影響はなく、そのため、翌年以降対策のための学習量が増えるわけではない、ということです。

特徴のもうひとつが、考えられる数値や組み合わせを「すべて答えなさい」という出題形式に代表される出題の仕方や回答用紙です。この形式は、一見問題の難度が上がるので、同校が初めて導入した当時は、対策学習を考える大手学習塾のいくつかから批判を受けていた記憶があります。しかし、今では多くの難関校がこれを採用するようになりました。この形式の優れた点は、複数ある解答のうち、いくつ探し当てることができるかどうかを見ることによって、その子の試行錯誤の筋の良さや、隈なく思考できているかどうかを、たった一回のテストという機会でも、なるべく正當に評価できることです。

これらの特徴によって、同校を志望する受験生の学びが過負荷なものでなく、健全な学びになることに対して同校の出題は長年大きく貢献してきていると思います。実際、私も今年同校を受験した受験生と関わっていましたが、その受験生は、模試や他の難関校の出題では実力を発揮しにくいものの、同校の過去問には見違えるように意欲的に取り組み、過去問を解くごとに、同校を更に好きになる、という様子が見て取れました。[昨年の記事](#)でも書きましたが、中学入試算数で扱われる問題が年々高度になり、入試選抜の競技性が高まってきている時勢の中、同校のような出題をする学校があるということは、子どもの健全な学びへの救いになっていますし、他の学校も出題の参考にして欲しいと一層思いました。

上記のような、最大の敬意を前提に、今年各問題に触れていきます。

### 大問1

栄光らしい試行錯誤を要求する問題ですが、1問目ということもあり、計算量が少し多かったかもしれませぬ。

### 大問2

2025 =  $45 \times 45$ で表されることを背景にした、今年ならではの規則性の問題です。面白い問題でしたが、小さい数での実験として、計算等を経ずとも正解できる小問を設けても良かったかもしれません。

### 大問3

とても面白い問題でした。非常に試行錯誤のしがい、考えがいのある問題で、大問1、2がそれなりに思考や処理に負荷がかかる問題でしたので、この問題を出題するなら、他の問題の量をもう少し少なくしても良かったかもしれないですね。

#### 大問4

とても栄光らしい問題でした。テストのテクニックを過度に教わらず、大問1から順番に挑戦していった場合、どれだけの受験生がこの問題に十分に挑めたか、というのは少し気になりました。

2025年2月2日  
ワンダーファイ代表 川島 慶